Ikiiki Maebashi Jin いきいきまえばしー人

刀作りの道を究めたい

刀工
髙橋　祐哉（恒厳）さん・37歳
南町三丁目

市内唯一の刀工で、ことし、日本美術刀剣保存協会主催のコンクールで特賞の協会会長賞を受賞した。

「刀というと敷居の高いイメージがあるかもしれませんが、見方が分かれば繊細で奥深いものです。多くの人にその魅力を知ってほしいです」

幼い頃から工作好きで、日本の伝統技術に興味があった高橋さんが作刀の道に入ったのは20歳の時。山形市の刀匠・上林恒平さんの下で修業を積んだ。

「最初の3年は雑用や炭切りだけ。昔かたぎの親方にはよく怒られました。それでも、やめたいとは思いませんでした。むしろ親方のそばで技術を見ることができ、とても勉強になりました」

5年後、文化庁の作刀許可を取得。さらに修業を積み、12年目の平成22年、独立し富士見町石井に鍛刀場を構えた。

以後、日々刀作りに励む高橋さん。これからも研さんを積み、納得のいく刀を作りたいという。

「見ただけで誰の作品か分かる、そんな腕を持つ刀匠を目指したいです」

そう語る高橋さんの目には、技を究める職人としての意志が宿っていた。

アーツ前橋 ARTS MAEBASHI Vol.13

私とアーツ前橋

この連載では、市民に寄稿してもらい、さまざまな角度でアーツ前橋を紹介します。第13回は、「未来の芽　里親プロジェクト」代表の寺澤徹さんです。

みんなで作品を見守りたい

寺澤　徹さん・59歳

アーツ前橋に一風変わった作品が寄贈・収蔵されました。それは、沖縄生まれでニューヨークを拠点に活躍する照屋勇賢さんの作品です。照屋さんは沖縄の基地問題や環境など、社会をテーマにした作品を繊細な表現で制作する作家として知られています。

平成23年3月、美術館構想を推進する市の招きにより、前橋に滞在していた照屋さん。そこで経験した東日本大震災の記憶が消えぬよう、悲惨な様子を伝える地元新聞の紙面に切り込みを入れ、小さな芽をいくつも立ち上がらせる示唆的な作品を作りました。その場に立ち会った私は、市民が小さな芽の里親となるという方法で作品を共同購入し、美術館に寄贈しようと思い付きました。それが「未来の芽　里親プロジェクト」です。個人で作品を購入し保管するのは難しくても、みんなで購入し美術館に寄贈すれば作品を見守ることができる、新たに生まれる美術館がより身近なものになり、それを介して自分の世界を広げることができる、と感じたのです。

一市民として、これからもアーツ前橋が市民の文化活動の触媒として機能することを期待しています。

問い合わせは
アーツ前橋　☎027―230―1144

クローズアップ CLOSE UP

駅前でみちくさ

6月26日から、前橋駅前けやき並木通りと新前橋駅東口通りで、オープンカフェが開かれています。軽食やドリンク、スイーツを提供するキッチンカーのお店などが出店。いつもは急ぎ足で通り過ぎていた人も、たまにはパラソルの下でゆっくり過ごしてみませんか。

合同学園祭で盛り上がる

6月20日、市内の大学、短大、専門学校生などが、中心市街地で合同学園祭を開催しました。ダンスや歌のパフォーマンス、模擬店などのほか、大声コンテスト「商店街の中心でなにを叫ぶ！？」を実施。出場者は、それぞれの思いを全力で叫びました。

満開のアジサイに包まれ歩く

10種類、約1万6,000株のアジサイが咲く荻窪公園で6月28日、アジサイまつりを開催しました。八木節などの催しでオープニング。アジサイの中を歩くスタンプラリーではアジサイの苗木などが景品に。見頃を迎えた花に、多くの人が見入っていました。